

社会委員会通信

36

2009.9.6

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

2009年の平和聖日は川崎戸手教会の孫裕久先生をお迎えし、「関係の回復」というテーマでお話していただいた。日本は単一民族であり、日本語だけが標準語として用いられていると多くの日本人は考えており、このような発言をする政治家がしばしば見受けられる。しかし、これは果たして事実であろうか。歴史的には先住民としてのアイヌの人々が存在し、また日露戦争の結果（国際的に日本の覇権が認められ）1910年（明治42年）の日韓併合以来、事実上日本の一部とされた朝鮮から、不足した労働力を補うため、強制的に日本に連れてこられた人々やその子孫が60万人もいると報じられている。

戦時中、日本人は天皇を神とあがめ、世界に類を見ない優秀な単一大和民族であると信じ込まされてきた。このような虚構がまかり通らなかったことは、歴史的事実が証明している。アイヌや朝鮮人の基本的人権が無視され、その存在が嫌われたり、差別されたりしてきた。

特に、創氏改姓という、世界の植民地政策の歴史でも類を見ない暴力的な政策が取られたことは特筆すべきことである。孫先生の「関係の回復」というテーマは、キリスト教徒としての「人と人とのあるべき関係 神の下にあって、すべての人間は対等であるべき」という視点から与えられたものであると思われる。

孫先生は在日韓国・朝鮮人二世の立場から苦難の歩みを「あますところなく」また「率直に」ご自分の半生を振り返りながらお話くださり、「単一神話」からの脱却の処方箋を、いくつかの実例をあげながら示してくださった。

私たちには「他を差別することによって、優位に立ち、自己満足に陥る」本能的な傾向が見られるのではないだろうか。因みにアメリカは「人種のるつぼ」と言われてきたが、事実上、お互いに融け合うことができず、肌の色、出身国、宗教、その他もろもろの要素により、分離しがちな傾向になっている。

私たちは「無意識に他を差別する心」から解放され、文化的にも異質なものを柔軟に受け入れ、「サラダ・ポウル」のような多様性こそが心をも文化をも「豊かさ」に導く契機となることを、孫先生のお話を通して学ぶことができた。このような機会が与えられたことに心より感謝している。参加者は61名（女性43名、男性18名）だった。（社会委員長：K.T）



平和講演会：関係の回復

川崎戸手教会牧師：孫 裕久

はじめに
改めまして、孫裕久であります。今日は本当にお招きいただきありがとうございます。「関係の回復」というテーマなんですけれども、何のことを意味しているのかということ

を、最初に話が迷子にならないように簡潔にお話させていただきます。少し象徴的な、ある出来事を紹介しますと、僕は先程教区社会委員会の委員長をしていると言いましたが、結構ほかの委員もいっぱいさせられておりま

して、他民族共生をめざす小委員会の委員長もしています。社会委員会もそうですけれども、横浜駅西口に県民センターというのがあります、その10階あたりにフリースペースがあって、そこをよく委員会で使います。

2、3年前の話、そのフロアでいろんなサークルやグループが自由に話し合いをしていました。私たちが委員会をやっているその隣で、7、8人、50歳から60歳ぐらいの女性のサークルが全員手話で話をしていました。「あ、この方々は聾者なんだな。手話を話されるんだな」と思った僕は、何かそちらばかり気になっていたのです。手話というのは、メモを取りながら聞くというわけにはいかないのです。お互いの顔を見ながらやらないと、会話ができない言語なんです。それで、みんなお互いの顔を見ながら、テーブルを囲んで集中して話をしているのです。

そこにある男の人がツカツカと来たのです。そして椅子に手をかけて「これ、いいですか？」。要するに彼は、自分のところのテーブルに椅子が足りないから借りに来たのです。それで彼は「これ、いいですか？」と言った。ところが手話で話している女性のグループは、お互いの顔を見ながら話しているから気づかない。僕は自分の委員会のことはそっこのけで、どうなるんだろうと見ていました。要するに「これ、いいですか？」という音声を聞き届ける我々にとってみれば、その仕草と声で、あ、この人は椅子を借りに来たというのが分かるんです。けれども、手話で話している人たちは、それが見えてないんです。椅子に手を置いているのが見えてないんです。彼が来たことすら分かっていない。みんな一生懸命手話で話をしているのです。

ところがその中の一人が彼に気づきました。それでパッと彼を見た時、その7、8人の女性が一斉にパッと彼を見たのです。彼はドキ

ッとしたんですね。「あ、この人たちは手話を話す人たちなんだ」と思って・・・(椅子を借りたい身振り)。彼は手話を知らないからね。20代の彼と50~60代の女性7、8人とがパッと向き合ったんです。どうなるのかな、と思った瞬間、ほぼ同時にその女性たちが手を差し出した。多分これは「どうぞ」という意味でしょうね。

我々がメモを取って集中している時、「これ、いいですか？」と誰かが来たら、「え、これって何？」とパッと見て「あ、椅子を借りに来たんだな」というのはできるんですよ。でも彼女たちにそれは分かるはずがない。「これ、いいですか？」という日本語が聞こえていないのです。彼が手を置いているということも意味が分からないはず。「これ、いいですか？」プラスその手で椅子を借りたいというのが分かるはずなのに、彼はこうしているだけなんです。それで固まっているんです。それを見て彼女たちは全員「どうぞ」とやったんです。僕は感動してしまいました。「すげえな！」

何が言いたいかと言うと、我々はどこに聾者がいるか分からない。でも聾者の方々は分かっているんです。「私たちには聞こえない言語、日本語がこの周りを渦巻いていて、みんなその日本語でやりとりしているんだ」ということを知っている。この違いなんです。要するに、マイノリティというのは、明らかに普通の人では気づかないことに気づくのです。そういうふうについて意識しているから。何でこんな話をしたかと言うと、僕にもそういう経験があるからです。

今の私の気持ちを言えば、私はこの日本にコリアン、朝鮮人として生まれて本当に良かった。ここは日本という国で、ここに日本人として生まれてくるのは当たり前の話。そういう人たちにはちょっと分かり難い、気づか

ないものを、朝鮮人として生まれたことによっていろいろ気づかせてもらえることが多いんです。ですから、マイノリティというのは、多数者には簡単には気づかない嗅覚というか、そういうものが備わっていくんです。そういうわけで、僕は在日として生まれたことを感謝しているのです。

実を言うと、最初から感謝したわけでもなくて、むしろ最初はイヤだったんです。それで何で「関係の回復」かということに繋がるのですけれど、要は「関係の回復」を分かりやすく聖書の言葉で言うなら、「和解」なんです。「和解」することが私たちの使命であると思います。けれども、なぜここで敢えて「関係の回復」という言い方をしているかというと、「関係」という言葉を僕はどうしても用いたかったわけです。「関係」というものが、この日本に・・・すみません、ちょっとややこしくなって。要するに、この日本に外国人として、自分の国でない所で生まれた者にとっては、自分が何者なんだという問いが付きまとうのです。結論を先に言うと、関係を回復していくことによって、自分が何者であるのかということを取り戻していくというか、そのことに目覚めていく。その先に最初に言ったように「ああ、在日で生まれて良かったな」と思えるような、そういうところに行き着いたということなんです。



日本社会で

(1) 文化の混在した家庭

広い意味で言うならば、今日のお話はそういう話なんです。最初から僕は「日本に朝鮮人として生まれてよかった」と思っていたわけではありません。そもそもオギャーと生まれた時に、ここが日本であるとか、僕は日本人じゃないとか、そんなこと分かるわけがないでしょう？ 恐らく皆さんが在日の家庭に

ひょっこり行けば、いろいろ珍しいものが目に付くと思います。聞きなれない言葉とか習慣とかが目につくと思います。けれどそこで生まれた子どもは、それをそのまま受容するわけです。たとえばキムチなど、今は日本の人は誰でも食べるでしょう？ でも40年、50年前は日本の人は食べなかったんです。だけど、キムチと梅干とお新香は当たり前のように肩を並べているわけですよ、我が家のお膳には。

朝鮮料理と日本料理が混在しているのです。それを日本の人がパッと見たら「変だな」と思うかもしれないけれど、そこで生まれた子どもには、キムチと梅干が肩を並べても何の不自然さも感じないわけです。言葉だって、朝鮮語と日本語が入り混じっているわけです。僕もある程度知っている。バイリンガルにはならないけれど、単語はある程度知っているんです。だけれど、それを日本語であるとか、朝鮮語であるとかという整理はしていない。例えばスプーンのことを「スッカラ」と言います。スプーンという言葉も当然知っているんですけれど、スッカラというのもスッカラと言うんだと思っていた。でもスッカラという言葉は、表の世界に行くに通じないような経験をするわけですよ。



(2) 外の世界との接触

家ではお父さん、お母さんを「アボジ」「オンマ」と言います。そういうふう隣の家でも言っていると自然と思っていたわけですよ。ありのままを受容して、そのまま育っていくので、自分の中で日本の文化と朝鮮の文化が入り混じっていくのです。それが幼稚園とか小学校に上がっていくと、だんだん皮が剥がれていくわけですよ。こういう事例を挙げるとキリがないのですが、例えば小学1年生の時、忘れもしません、お正月が終わって

学校に行きました。そうしたら、先生がお雑煮やお正月の食べ物の話をするんです。「皆さん、お正月は美味しいものを食べましたか？」それで、みんな「おせち料理食べました」「お雑煮を食べました」という話になります。分からないんです、我々は。

おせち料理という言葉を知らない。僕がおせち料理というものを初めて食べたのは、20歳の時でした。私の長兄が日本の方と結婚して、そこにお正月に行った時、生まれて初めて食べた。大して美味くなかったけれど…。それで「お雑煮食べました」ということからお雑煮の話になりました。先生が「お雑煮と言っても、家によってみな違うんですよ。味噌、赤味噌、お餅の形も丸もあれば四角いのもあるし、一つ入っていたり二つだったり、いろいろあります。」こういう話だけで終わってればよかったのに、「自分の家のお雑煮はどんなのか、一人ずつお話ししましょう」と言って、当てていくのです。

僕は今、「孫」と言っていますが、孫と名乗るようになったのは神学校に入ってからなんです。今、在日のほとんどは日本の名前を名乗っているんです。だからこの人が在日であるということは分からないのです。僕も当時は内田裕久（うちだひろひさ）を名乗っていたから分からない。それで一人ずつ当てられると、「味噌でした」とか「お餅は四角でした」とか。だんだん僕の番が近づいて来ます。分からないんです。焦るんです。本人は真剣なんです。話についていけないから。「何のことを言っているんだろう？」と焦って考えている。「何だろう、お正月に食べるもの。何かスープのようなもので、お餅が入っているもの・・・。」いろいろ考えていくと、多少思いつくものがある。

朝鮮には朝鮮のおせち料理というものがあります。日本のそれのように格好良くはない。

そこで一つお正月だけのものではないけれど、お正月に必ず出るものがある。「トック」というものです。要するに、餅が入っているスープなんですけれど、家庭によって違います。我が家は鶏がらスープで、餅は細長い棒のような餅で、それを、キュウリを切るように斜めにスライスしていくんです。そうすると楕円形の薄っぺらな餅ができます。それがどさっと入っている。卵とじて、鶏肉が入っていて美味しいんです。

ちなみにハングル講座をすると、「ト」というのは餅という意味です。「ク」はスープです。で、餅スープだから雑煮なんです。では練習問題。「ピビンバ」「ピビ」は混ぜるという意味です。「バ」はご飯です。だから混ぜご飯なんです。では「クッパ」はどういう意味でしょう。「トック」の「ク」に「ピビンバ」の「バ」。スープとご飯で雑炊なんです。クッパを食べたことある方？ まあそれだけのことですけれどね。

韓国へ行って食堂に入ったら、メニューが書いてあるけれど、あまり難しく考える必要はないです。要は一番下だけ見ればいい。この文字（ ）が何とかこう書いてあったら、これはご飯類なんです。これ（ ）が書いてあったらスープです。それで、これ（ ）が書いてあったら麺類なんです。だから何でもいからこれを見て、これはご飯、これはスープ、これは麺が出てくる。そう思ったら、「これ頂戴、これ頂戴」で大体当たり障りのないやつが出てきます。

要するに、僕はトックだと思ったんですよ。トックの話をしているんだろうと思っていたら、「内田君のところのお雑煮はどんなふうですか？ 味噌は赤ですか、白ですか？」。味噌は入っていなかったけれど、赤くないから適当に「白です」と言うんです。「餅は丸ですか、四角ですか？」と言うんですが、楕円形なん

か小学1年生は分かりません。四角でないからから「丸です」と言うと、「いくつ入っていましたか？」と聞くわけです。人類史上トックの餅の数を数えて食べた人はいないと思う。でも何個かと聞くから、適当に「20個ぐらい」と言うわけですよ。そうすると、みんなにバカにされるんです。

そういうような失敗を、外の世界でいっぱい繰り返した。そして、誰かに言われたわけではなく、何となくうちの家は変だ、違うんだ、ここは日本という国で、僕たちは朝鮮人なんだということが分かってくる。そして、外の世界でそういう家の文化を出すと笑われる、バカにされる。そういう経験をしていくと、出さなくなっていくんです。



(3) 住民票がない

ほかにもいろいろな失敗をしました。まず、誰もが経験することと言えば、役所に住民票をもらいに行きます。高校生の時に原付の免許を取るために住民票をもらいに行く。我々は住民票がないんです。外国人は住民票がない。「内田裕久」と書いて申請すると、「内田さん、内田さん」「ハイ。」「最近引っ越して来たんですか？」と聞かれるんです。「え！何言ってるんや。ここで生まれてずっとここで育ってきているのに・・・。」すると「失礼ですが、外国の方ですか？」と言われる。「あ、外国の方はあちらで外国人登録証の記帳をいただいてください」と言われる。我々は外国人登録証明書というのを持っています。このカードが我々の身分を証明するものなのです。こういった外国人登録カードが皆さんの言う住民票に代わるものなんです。

「孫裕久」という本名があることは一方で知っていたけれど、日常では使わない。使わないから「内田裕久」がやはり僕の名前なんです。よくそれを「あれは奴隷名だ」とか何

とか言う人がいるんです。言われてみたら、まあ概念的にはそうなのかもしれないけれど、家の中でも友達でもその名前を名乗り、呼ばれてもいるし、自分の名前であることに変わりないのです。だから、ついつい当たり前のように「内田裕久」と書くわけです。そうすると時々「いや、お前は外国人なのだ」ということを再確認させられることが多いのです。



(4) 失恋

大体誰もが経験することですけれど、失恋ですね。失恋はするんですよ。19歳の時、あれ初恋だったんですね。19歳で初恋とはちょっと遅いかな。別の言い方をすると、女性とお付き合いをするのが初めてだった。実を言うと、その子は中学時代の同級生で、ひょんなところから再会して、二人は恋に落ちたわけでありませぬ。僕、人生で一番幸せだった時ですね。最高でした。だけど、やはり我々は「いつか言わなあかん。いつか言わねば・・・」というのがあるんですよ。

『GO』という映画がありました。この映画に同じようなシーンがあるのです。日本の女の子と付き合っている在日の子が、「いつか言わなあかん、いつか言わなあかん」ということで告白するんですね。その時、彼がこう告白するのです。「僕は日本人じゃないんだ」と。すごく感動しました。まさに僕がそう言ったんですよ。「僕は韓国人なんだ」とか「僕は朝鮮人なんだ」というような言い方はしなかった。そういう言い方をすると、何か韓国人が悪いのか、朝鮮人が悪いのかということになってしまうじゃないですか。だから客観的に「僕は日本人じゃないんだ。」という言い方をしたわけです。

そうすれば「^{なにじん}じゃ何人なの？」という話になるじゃないですか。「いや、実は・・・。」というふうに行くんですけど、「僕は日本人じ

やないんだ」と言ったその時、彼女は言った。

「知ってたよ。」

可愛いじゃないですか。さすが俺が惚れただけの女であるわ。知ってたのか！嬉しいけれど、その子は一人娘。兄弟がいなくて、母親に話をして、結局気まずくなってしまって、そこからは早かったですね。結局別れ話になってしまったわけなんです。言いたいのはその後の話、僕は死のうと思いました。19歳で恋に落ち、20歳で別れたのですけれど、死のうと思いました。「死んでやる」と。

死にきれなかったのは、理由があります。僕には兄が2人いて、次兄は板前で、寿司屋をやっています。最後は兄貴の寿司でも食って死んでやるうか。結局自殺なんかできなかつたと思うけれども、そういう思いで兄のところへ行きました。ほかにお客がいなくて、「どないしたんや?」「うーん、実は・・・」と話をしたところ、「そうか、辛かったな。今日は好きなだけ寿司食って、好きなだけ飲んで帰れ。」そういう同情を僕は求めていたのだと思います。それで兄貴に「やはり韓国人はあかんわ。俺、もう死にたいよ。死んでやる」などと言ったのです。

ところが、兄はあまり同情してくれない。ハッと驚いて寿司を握る手が止まるかと思ったら、そうではなかった。兄は手を休めずに「アホやなお前。そんなんで死んでたら、俺は何回死ななあかんのや」と軽く言われてしまったのです。軽〜く言われた。思いっきり軽く。大体兄弟でそういう話はあまりしないものです。その時「あ、兄貴もやはり同じ経験しているんだ」と思い、こんなことで死んだらあかんなと思って立ち直ったのです。言えばきりがないのですけれど、そんなこともありました。



(5) 使い分け

我々は日常の中で自分が韓国人であることを隠している。だから、外の自分と家の中の自分を使い分けしています。僕の弟はこの使い分けが下手で、外で「オンマ、オンマ」と言っていたのです。オンマはお母さんです。僕は小学校に入ったら、もう外ではオンマなんて言葉は使わない。公園で遊んでいて、母親の買い物帰りの姿を見たら「オンマ!」と言いかけるのだけれども、言えない。「お母さん」なんて言うと、この辺にブツブツが出てきます。普段は「お母ちゃん」と言っている子が「ママ」と言うような感覚ですかね。

「お母さん、お母さん」と呼びかける。ところが母親は分からない。分かるわけがない。自分の子どもが自分を「お母さん」と呼ぶわけがない。気づかない。気づかない理由が小学生なりに分かるんです。追いかけて行ってお尻を叩きながら、「何回も呼んでいるのに、なんで?」などと愚図ったこともあります。

弟はアホで、3年生ぐらいになるのに、まだ「オンマ、オンマ」と言っていました。そうしたら、友達が「お馬」と聞き違えて、「お前の家は馬があるんか?」とみんなで来て、庭先でお馬、お馬と言うんです。その晩、僕は弟に「オンマは家ではオンマだけれど、外ではお母ちゃんだ。覚えとけ!」と頭をど突きました。悪いことをしたなと思っているんですけど・・・。

繰り返しになりますけれども、自分というものをできるだけ隠して生きている。実を言うと、私たちの身の周りにはそういうふうに分かたず自分を隠して生きている在日がいるということなのです。例えば、川崎の桜本辺りでは在日大韓教会があって、民族の名前を名乗っている人がいます。そういう人たちは立派だと思ふ。だけれど、僕に言わせれば、もう彼らは問題ない。むしろ問題は、そういうものを

名乗ることができず、名乗らなければならぬとは思わなくても、自分を隠して生きている人たちの中にこそ、本当の意味においての在日、マイノリティの問題があるということを示し上げたいわけです。

神学校時代

(1) 民族名

そうこうしているうち、私は会社勤めをして、どこでどう間違ったか、牧師にでもなるのか、という感じで神学校を受験し、町田の方に出て来ました。それが28歳の時でした。その時に名前を本名にしたのです。これからは「内田裕久」ではなく「孫裕久」で行くんだ。それは、自分にしてみればけっこう重い決断で、清水の舞台から飛び降りるようなつもりで本名に切り替えたのです。その時、悪口を言うつもりはないのですけれど、自分の出身教会の牧師に「僕、これから孫裕久で行きます」と言ったら、牧師先生は何と言ったか。「そうか。『そん』『ゆうぐ』『孫』『裕久』・・・あ、ありますよ。おかしくないよ。要するに「裕久」という名前は日本人の名前としてもあるだろう。「孫」というのもあるだろう、と自分に対する一つの慰めだったと思うんです。でもはっきり言って慰めにも何にもないのですよ。

「頑張ってるよ。祈っているよ」と背中を押してくれたらいいのに、むしろ僕に対する同情というのか、その牧師なりの愛の表現だったのかもしれない。「孫裕久という名前は日本の名前でもあり得るから、多分大丈夫だろう」（要するに名前からは韓国人であることは解らないであろう）というような感じだったのです。僕にとってはショックでした。それで孫裕久で東京に出て来ました。1991年でした。

最初、今まで内田裕久だったからピンと来ないのです。「孫さん」と呼ばれても、「あ、

俺だ俺だ」というように、28年間「孫」なんて名乗ってこなかったから。「孫さん」と言われると、一瞬間が空きます。自分のことを「孫裕久です」と言うのも、最初はちょっと気合いを入れないと、直ぐに出て来ない状態でした。僕は今まで本名を名乗ってこなかったし、別に民族運動にも参加してこなかったし、いわゆる当たり前前の在日だったのです。自分を隠して生きてきたわけです。



(2) 在日らしく

それで僕は農村伝道神学校に入学したのですけれど、そこはちょっと左派系で、卒業生や在校の先輩に在日の人が出て、在日大韓基督教会なんかでいろいろ民族運動とかに携わってきた方々がいたのです。だから、それなりの問題意識を持っていた。古い言葉で言うなら、僕はノンポリだったんです。在日のノンポリでした。そういう反対運動とかやっている奴をみんなで支えようとか、やっているような農村伝道神学校の在日の先輩、また卒業生に比べたら、「今度入ってきた孫裕久という奴は何や。これでも在日か」ということになっていくわけです。在日らしからぬ在日なんです。もうちょっと、例えば多少ハンゲルをしゃべれるとか、在日の運動とか、いろいろ知り合いが多いとか・・・。全然知らないのです。

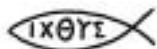
あれは日本の錯覚です。在日だったら、大阪の金クン、朴クン、王クン、みんな知っている、親戚かと思っているんです。そんな感覚を持っているんです、学校の先生たちも。「大阪の釜ヶ崎の朴君元気にしておるかね？」なんて、知らんですよ。それを当たり前前の感覚で聞いてくる。何かだんだん恥ずかしくなるんです。僕はこれから民族のために戦うぞとかいう思いで孫裕久にしたのではなくて、これからは出世とか関係ない世界に行くのだから

ら、ここは一発本名を名乗ろうという、そんな思いで神様に対する純な献身の形あるものとして僕は本名を名乗った。

ところが名前を聞いて在日と分かり、こいつやり手の奴だなと思っていたら、何だかふぬけな在日が来て、お前はそれでも在日かと。学生の中には、日本人だけれどハングルをよくしゃべる奴はいるし、僕なんかよりも在日の歴史や朝鮮の歴史を知っている奴はいるし、中には民族楽器とかやる奴がいて、僕よりよく知っているんです。僕の方がむしろ在日とは何かをそういう人たちに教えてもらうような始末でした。

そうすると、僕もプライドが高いから「俺も在日さ」と胸を張って言いながら、「在日とは」と銘打つ本を隠れて読み漁りました。あ、これが在日なんだと一生懸命勉強したのです。そして自分で「在日だ、在日だ、在日になるんだ」とまるでタイガーマスクが虎になるように、デモがあったら先頭に立って腕をまくり上げ、俺は在日なんだとやればやるほど何か空回りするんです。違うんですよ。

(3) 挫折



決定的だったのは、当時フェミニスト神学がはやっていたのです。うちの神学校は多分日本の神学校で初めてではないでしょうか。山口里子さんという方を招いてやりました。そうしたらフェミニスト神学ブームが一気に来て、こんなことを言い出す学生が出てきたんですよ。y軸で見事に差別の構造を証明したのです。横軸に女・男、縦軸に白人・黒人。つまり女性は男性から差別される。すなわち女性の中でも黒人の女性は一番差別されている、ということになります。いかにも論理的に思えるでしょう？ フェミニスト神学です。この縦軸の白人を日本人に、黒人を朝鮮人に置き換えると、日本人は朝鮮人を差別

し、男は女を差別している。何ともこの在日朝鮮人の家庭というのは日本以上に父権的で、この在日の中で一番苦勞しているのは女性なんだということで、「お前は在日の父権的な社会の男だ」と、僕は日本の女性から糾弾されました。

確かに僕は非常に父権的でした。父権的な親に育てられたんですよ。僕の親父というのがとんでもない人で……。その話は後にしましょうか。とにかく厳しい。真面目なクリスチャンなのですけれど、「妻は夫に仕えよ」という箇所は大きな声で読むのですが、そのあとは何かボソボソ言ってる。「子は親を敬え」という箇所は大きな声で読むのだけれど、そのあとはもやもやと読む。自分の都合の良いところだけ大きな声を出す。それで僕は今まで神学校に入って在日だ、在日だと言ってきたけれど、「在日って何なんだ？」「俺の生きてきた歴史は一体何だったのか？」「在日とは本から学ぶべきものなのか？」……。

韓国留学時代



(1) はじめての優遇

とどのつまり、僕は親が生まれた国、朝鮮にルーツを持っている。その一点が僕をここまで悩ますのであって、俺はここ日本で生まれて日本で育っていくのだから、そんなのどうでもいいではないか、俺は俺なんだと。だから一度韓国に行って、その国がどんなものかこの目で見届け、それでもう決別してこようと韓国へ行ったわけなんです。3年生の時に休学して行きました。行ったら良かった。いい国でした。例えば、子どもが甘えて母親に「オンマ、オンマ」と言っている。美術館に行った時、子どもが母親に「オンマ、これ何？」と聞いている。当たり前のように「オンマ」と言っている。当たり前ですよ、あそこでは「オンマ」と言うんだから。そうだ、

当たり前なんだよな、と思ったり・・・。

僕を迎え入れてくれた教会が非常に理解のある教会で、よくしてくれました。日本から来た同胞だということで、非常に優しくしてくれたのです。30歳の時に行きましたけれど、30年間生きてきて、孫裕久と名乗り、そのことゆえに恩恵を受ける、優しくしてくれるというようなことは、人生で初めてでした。韓国人であるがゆえに得するということは初めてだったのです。すごくよかった。よかったというのは、韓国語を勉強するクラスで、大体初級は同じ国から来た者同士にまとめる。アメリカから来た者はアメリカから来た者、日本から来た者は日本から来た者でまとめるのです。で、僕は日本から来た者のクラスの中にいました。そうすると、韓国語の講師の先生は日本人には冷たいんです。当時ソウルでは、まだ日本人に対して偏見というか、差別がありました。そして日本から来た同胞には優しい。そこでは差別が起こっているのです。僕は優遇されているわけです。今まで韓国人であるゆえに差別されていたのだけれど、韓国に行ったら、韓国人であるがゆえに優遇されるわけです。だから、すごく嬉しくなりました。気質も似たようなところがあって、ああ、いい国だなと思いました。

(2) 日本人に間違われる



一つ行き詰まったことがあった。それは黙っていたら、下手な韓国語をしゃべると、知らない人との会話では、日本人と間違えられる。タクシーが安いので、分からない所へ行くと、すぐタクシーに乗ってしまう。しゃべると、日本人だと思われて遠回りされる。買い物も、安いものを買おうと思って中古品の市場へ行くと、高い値段を吹かけられたりするんです。一緒に行ってくれた韓国人の友達が、「いやいや、おじさん違うんだ。この人

は日本から来た在日なんだよ」と言ってくれると、「何だ、それならそうと最初から言えばいいのに」とガクッと値が下がる。

道端で果物など売っている店がまだまだ沢山あります。「リンゴをください」と言っても、お前なんか売るか、みたいな感じです。また日本人と間違えられたなと思って、「いや、僕は実は日本で生まれた韓国人で、私の両親はこの朝鮮の生まれで・・・」と言うと、コロッと態度が変わる。「そうか、そうか。アボジ、オモニは息災か？ 持ってけ、持ってけ」となるわけです。そうすると、今度は自分が日本から来た在日だと言わないと、逆に差別を受けるわけです。韓国に行ったら、日本人と間違えられる。日本にいた時は自分を隠していたのに、韓国ではそれをささないで逆に差別を受けるということを経験しました。



(3) 純粋な韓国人

極めつけは、下宿をしていた所に大阪の生野から来た3人の学生がいました。高校を卒業してすぐ韓国に来て大学に通っていましたが、本当に頭のいい優秀な3人でした。彼らは一緒に飯を食いながら言うんです。「孫裕久さん、純粋な韓国人って聞いたことあるでしょう？ あれ、僕たち許せないんです」と。純粋な韓国人とはどういう意味かと言うと、韓国で生まれた韓国人のことを言うのです。それは、日本から来た韓国人は純粋ではないという意味ではなくて、日本から来た韓国人は在日同胞という言い方をするんです。国籍的に言うと、どちらも韓国人。ただその人は日本から来た人なのか、韓国生まれなのかということを、話の流れの中で明らかにしなければならなくなった状況の時に、この人は韓国で生まれた韓国人だと言うのではなくて、短く絞って純粋な韓国人と言うわけです。

それが日本から来た同胞たちは聞き捨て

ならないのです。何か聞き捨てならない。純粋な韓国人 私も純粋な韓国人・・・というようなわけで、一生懸命純粋な韓国人になろうとする。その一生懸命さ、努力の姿たるや見るも無残というか、あれはショックでした。“This is a pen.”みたいな決まりきったような韓国語はしゃべらない。わざわざ釜山辺りの方言を学んでそれをしゃべる。それは東京に来たフランス人が、東京で大阪弁を勉強しているようなものです。変でしょう？ 純粋な韓国人はこういう言い回しをするんだという感じなのです。

当時、僕はたばこを吸っていました。ある時、たばこの火を消したら、「孫裕久さん、純粋な韓国人はそんな消し方はしませんよ」と言う。「純粋な韓国人はこうやって消すんです」と、短くなったたばこの灰を、持っている手の人差し指でポンと弾いて飛ばすんです。たばこの火を消すのに純粋もへったくれもあるかと思って、次の日学校へ行って休憩時間にたばこを吸いながら周りを見たら、皆そういうふうには灰を落としている。それを見たら、いつの間にか自分もそうやってしまっているのです。そういう自分に気づいた時、何か知らないけれど、あ、ダメだと思った。いい国だったけれど、ここは俺の生きる国ではないなと思ってしまった。



自分は何者か？ - 自分探し -

(1) 周りに合わせるだけの自分

日本では日本人のように生きてきて、神学校へ行ったら在日、在日、と在日のようにして生きて、韓国に来たら一生懸命純粋な韓国人になろうとしている。三者三様です。ある時は隠していた。でも、ある時は出さなければいけなかった。要するに、周りに合わせていた。周りに同化していく。僕らはそういう習性が本能的に血と骨に染み込んでしまっ

ている。それが痛いほど分かる。自分とは何なんだろう、自分とは何者なんだ。時には本名を名乗り、時には俺は在日だとやってみたり、そして韓国に来てみたけれど、結局韓国人として受け入れられたいがために韓国人のようにして、日本人に対しては日本人のように、神学校に行った時は、在日であることを求められて在日のように振る舞い、韓国では韓国人のように振る舞い、常に周りに合わせて生きるという習性が身体の中に染み込んでしまっていると気づいた時、俺は一体何者なんだと、居ても立ってもいられなかった。

振り返ってみると、親元で暮らしていた時、体に染み込んでしまった朝鮮臭いものを全部そぎ落として生きてきたのです。自分の中に染み込んでしまっているから、何が日本語で何が朝鮮語なのかということ、ちゃんと使い分けていなければいけない。だから親から受け継いだものは全部そぎ落とした。要するに、人間というものは何か積み重ねて成長していくものだけれど、在日の子どもは自分の中に染み込んだものをそぎ落として自己形成していくわけです。だから僕は親のことを意外と何も知らない。親から受け継いだものを全部否定して、とにかく親の元を離れたかったんです。



(2) 父と出エジプト

父は厳しくて、叱られなかった日はない。兄が剣道していたので家に竹刀がごろごろして、その竹刀でど突き回されていました。ある時は壁に向かって立たされ、「いいと言うまで立っている」と言いながら、自分は寝てしまう。確かに悪いことをして折檻を受けているのだけれど、言い訳一つ聞いてくれない。言い訳を聞いてくれたのは、壁だったんです。僕は壁に向かって何か言っているうちに、だんだん人格がゆがんでいったわけです。結構

ひどい、いじめのような刑罰は、茶碗で米をすくって新聞紙にあげ、その米粒を数えさせるのです。

父は礼拝を休ませてくれなかった。礼拝を休むなんて命がけでした。でも僕はアボジの弱点を知っていた。アボジは友達がいなかったんです。7歳で日本に渡ってきて、子どもの頃から言葉がうまく通じなくて、よく食べていたようなんです。だから、しゃべる前から手が出て、けんかばかりしていた。そんな話しか聞かされていなかった。友達がないということが彼の弱点で、僕が高校生の頃、『銀河鉄道 999』という映画をみんなで見に行こうということになったけれど、その日は日曜日だった。僕はみんなと一緒に見に行きたかった。そこで僕は父に嘘をついた。「今日の日曜日、中学の同窓会なんです」。そうしたら、「行って来い」と許してくれた。けれど後味は悪かったですね。それで、その手は二度と使いませんでした。僕は自慢するわけではないけれど、物心ついてから礼拝を休んだのは、いつといつと全部言えます。まず休んだことがない。学校も休んだことがない。高校の時肺炎で2週間入院したけれど、その時と小学校の時交通事故に遭って1週間入院した、それ以外に休んだことがない。教会もその時と『銀河鉄道 999』の時だけ。

僕は早く家を脱出したいと思っていた。『信徒の友』でも触れたように、僕は5人兄弟です。家出していないのは僕だけなんです。みんな家出している。とにかくみんな「出エジプト」して行く。でもエルサレムに着く前に捕まって引きずって来られたのですけれど・・・僕は真面目な子だったと言いたかったわけではなくて、家出するような根性がなかったのです。ただ、やるなら合法的にやろうと考えていた。高校卒業する時に、大学に行くと言ったら、「勝手に行け、金はない」

と言われ、僕は夜の大学に行きました。ただその大学はぎりぎり家から通える所だったのです。それで昼間働く就職先ですが、学校に来ている求人票を見て探した。普通求人票は、給料とか仕事の内容とか福利厚生とか見るのに、そんなものは一つも見ない。ただ住所、家から通えない所というのが第一条件。それでわざわざ家から通えない所に就職し、「ここは家から通うことができませんので」ということで僕は自由になりました。



(3) 差別されない努力をしている姿

そこで10年勤め、農村伝道神学校に来たわけですが、神学校に入学した時、川崎戸手教会、その当時は川崎戸手伝道所と言い、その時の主任担任教師は大倉一郎さんという方で、担任に関田寛雄牧師がおられました。関田先生は説教を教えに来られていたのですが、その関田先生に「うちの教会に来てみないか」と言われて行ったのが運のつき。旨いものをご馳走になり、小遣いもいただいたりして、そのまま居ついてしまったのです。川崎戸手教会は多摩川の河川敷にある在日の集中地域だったのです。

僕はそこに入った時、ショックでした。そこではハルモニたちが道端でキムチを漬けていたり、その中にある飲み屋では、みんな朝鮮の歌を歌ったり、「アボジ」「オンマ」とか言っている。その河川敷の朝鮮の集中地域では、解放されているんです。僕は、親元から出エジプトをして長らくそういう文化から遠ざかり、久しくそういうものに触れていなかったのです。すごいショックを受けたのです。神学校の最初の2年間、結構影響を受けました。

話を戻しますと、韓国で行き詰まり、やはり日本に帰ろう、日本に帰ってやり直そう、自分とは何かを自分のやり方で発見し直そう

と、寮を出て教会に住み込むようになったのです。日常的にその街の人と会っていると、1週間に1度では分からなかった部分があるように見えてくるものです。いろいろなことがありました。例えばお葬式。普通その町は大体年に5人ぐらい亡くなっていた。お葬式と言うと、大体街区の斎場を借りてやるのですが、日本名でやるのです。僕の感覚からすると、あり得ない。1世の葬式を2世が日本名でやるんです。昔はその町で人が亡くなったら、その町で葬儀をしていた。なぜかと言うと、その町だけで人間関係が完結していたから。けれども、時が流れて2世、3世、4世となってくると、その子たちはその河川敷の町を越えて外の街区の人たちと関係ができる。だから葬式と言うと、そういう人たちも呼ばなければいけない。そうすると、あの土手の中の河川敷では葬式はできない。まして親の本名で葬式はできないのです。自分たちは外では日本人のようにしてきているから。

僕にいやな思い出があります。中学1年生の時、お祖父さんが亡くなった。僕は当時在日大韓西成教会に行っていました。その葬式は「私たちは朝鮮人でした」ということを世間に知らしめるような葬儀だったのです。家の外にスピーカーをいっぱい付けて、葬儀を仕切る牧師が韓国語でやるわけです。大きく本名が出ているし、来る人来る人が「ああ、朝鮮人か、やっぱりな」という感じでしたけれど、みんな見ていく。僕は中学生だから学校の先生も来るわけです。近所の子どもたちは授業があるから来ないけれども、親から聞くわけです。もう僕の人生は終わったと思いました。中学2年生で俺の人生はもう終わったと思いました。学校へ行ってもアンタッチャブルです。「お前はそうだったのか！」という感じです。

そこでは1年持ちませんでした。それで、

間もなく引っ越しました。大阪市内から和泉市へ変わったのですが、日本キリスト教団の教会に通うようになったのは、それからです。僕にはそういう経験があったのですけれど、1世が亡くなった時は辛いけれど本名でやるものだと考え、まして僕は通名から本名を名乗っているし、意識も韓国から帰ってきて随分進んで来ているので、あの土手の人たちが自分の親の葬儀を日本名でやることを何か許せなかった。でも分からないわけではないな、俺も辛かったし・・・というのはありました。

時を同じくして、私のお祖母さんが亡くなった。ちょうどその時、私のアボジが喉頭がんで入院中だったのです。集中治療室のカプセルの中で生死をさまよっていた。大阪の長兄から、ハルモニが亡くなったから帰って来いという電話がありました。それでちょっと気になって、「ハルモニは何で葬式をするの？」と聞いたら、日本名でやると言うのです。電話では話にならない。早く大阪へ帰って、本名で葬式をやらなければいけない。ここだけは譲るわけにはいかない、そういう思いがあったのです。

「在日は本名を名乗らなければならない」とは思いません。結婚についても好きな人と結婚すれば良いと思います。兄弟も皆日本人と結婚しています。それはそれで僕はいいと思う。どういう仕事に就くのか、帰化するなら、したらいいんです、兄弟もみんな帰化しています。だけれど、自分の親のルーツ、それだけは否定してはいけません。僕はそこが最後に譲れないところだったから、何とか早く大阪に帰ってそれを阻止しようと新幹線に飛び乗ったんです。けれども新幹線に乗って時間がかかっているうちに、だんだん昔のことを思い出して、「お前、偉そうなことを言っているけれど、お前だって会社勤めしていた時に、お祖母さんが亡くなったらどうしよう

と考えた時があったろう？」心の中の自分が言うわけですよ。実際そうだった。お祖父さんの葬式で辟易しているものですから、お祖母さんが亡くなったら、自分は会社には伏せて、黙って有給休暇でもとって葬儀に出るつもりでした。

兄弟たちは今、日本名で、しかも日本に帰化して日本人との人間関係の中で暮らしているんだ。それをお祖母さんが死んで、お祖母さんの本名でやって、ああ内田さんのところは朝鮮人だったんだということが知れ渡ったらどうなるんだ。お前はそんな気持ちに分かるのか。お前は今、本名を名乗っているからいいかもしれないけれど、兄弟には兄弟の人生があるのだ。お前にそんなことが言えるのか。・・・なんていう声がこの辺から聞こえてくるわけですよ。それで名古屋辺りに着いたら、もうええか、と思ってしまった。

新大阪から阪和線に乗って熊取という所へ帰るのですが、中間の天王寺にアボジが入院していました。大阪市大病院です。それで実家に帰る前にちょっと見舞っていきこうと思って行きました。誰もいない、何もしゃべらないアボジ。本当に鬼のように怖いアボジでしたけれど、手術を受けて何も言わないで生死をさまよっているアボジをじっと見ていると、何か熱いものがこみ上げてきて、また復活してきたのです。「そうや、ここはやっぱり譲ったらあかんのや」「アボジが元気やったら、ちゃんとハルモニは本名で葬儀したはずなんや。ここはやはりアボジの意思をちゃんと継がなあかんのや」と言ったら、「そうだ、それでいいんだ」という声が聞こえてくるんです。

大変偉そうですねけど、マルチン・ルーサー・キングが公民権運動の中で内なる神の声を聞いたというあの感じで、「そうだ、お前になすべきことをしろ。よっしゃ！」と熱い思

いのまま家に行きました。そうしたら葬儀の準備は全部整っている。印刷物も全部できていて、ばかでかい木の板に祖母の日本名も書いてある。もうやり直しはきかないのかなと思ったのだけれど、関係者以外の方には出てもらって親族だけで話し合い、僕の熱い思いを語ったのです。そうしたら長兄が「分かった。じゃお前の言うとおりにやろう。でもやり直しがきくのか？」と言うので、葬儀屋を呼んで聞いたら、「大丈夫です。これだけもらいます」。それで、やり直しということになりました。全部韓国名に書き換えてやり直したのです。

何を申し上げたいかと言うと、自分がハルモニの葬儀はそういうふうにできましたけれど、ほとんどの人たちは隠しているんです。分からないようにしている。隠すことによって摩擦が起こらないのです。

私の姪が4年前に結婚しました。姉の娘です。私だけ結婚式に呼ばれなかった。姉から電話がかかってきて、「娘が結婚したの」あ、そう、おめでとう。結婚したって出来ちゃった結婚か？結婚式はいつあるんだ？」「結婚式終わってん」いろいろ回りくどい言い訳をするのですけれど、要するになぜかと言ったら、姪は日本人なんです。姉の旦那が日本人だから。姉は韓国籍のままなんです。姉は別に帰化する必要ないのです。問題は子どものことが心配なので、自分のことはどうでもいいのです。子どもが日本国籍を取ったから、それでいいんです。

日本国籍の者同士が結婚するわけだから、何の問題もないのだけれども、結婚する旦那のほうがお前のお母ちゃんが韓国人だということは家の親には黙っていてくれと言ったわけですよ。それで今さら日本人同士の結婚だし問題ないし、親も田舎の人間で説明した

って分からないし、変に問題になるだけだからもう黙っておこうや、ということになって、それが結婚式を挙げる一つの条件みたいになったのです。その条件をうちの姉が呑んだわけです。兄弟で本名を名乗っているのは僕だけです。それで僕は結婚式には呼ばれなかった。親族の中で一人だけ孫裕久なんておかしいじゃないですか。

僕は悲しかったですね。何で呼んでくれなかったんだというのではなくて、まだそういうことがあるということが悲しくて、その晩、枕を濡らして泣きました。

姉の名誉のために言っておきますが、その2年後、息子が結婚したんです。その時は僕も呼ばれました。そうしたら、姉は自分の息子の結婚式なのに、息子を放っておいて僕の袖を引っ張ってみんなに紹介しまくるんです。「うちの弟です。今は川崎にいます。孫裕久です」「うちの弟です。孫裕久です」。だから「もうええ、もうええ」と言うのだけれど、娘の結婚式の時は悪かったという思いがあったのでしょ、息子の結婚式の時はそういうふうにしてくれました。

あの時、姉は「結婚式に来てくれ。でも悪いけど通名で来てくれへんか」と言うこともできたと思う。でも、それをするということは、僕の生き方を否定することだから、彼女はそれをしなかった。かと言って僕を本名のまま呼んだら、娘の幸せに響く。とするならば、僕を呼ばないということが最善の策だった。僕も尊重し、娘も尊重するという姉の選択は間違っていなかったと思います。

今は朝鮮人だと言って石を投げられるような時代ではありません。いい時代になりました。ヒューマニズムは成熟し、昔のような差別はありません。本当に人権意識、ヒューマニズムが成熟してそうになっているのかというと、必ずしもそうではない。差別される側

が差別されないような努力をしているわけなんです。差別されないように分からないようにしている。

川崎のあの土手の中で生まれ、住んでいる女の子がいますけれど、その子は幼稚園から本名を名乗っていた。うちの教会に通い、子どもの教会に来ている子でしたから、教会ではみんなでこの子を支えていこうということで本名宣言した。けれど、その子が高校生になった時、近くのセブンイレブンでアルバイトを始めました。そうしたら、そこでは通名で仕事をしている。ショックでした。幼稚園から本名を名乗ってきた子です。その子がアルバイトするのに通名を使っているのです。びっくりしてそのオモ二のところへ行き、「なんでやねん、通名使っているやないか。どないしたんや」と言ったら、あの子が自分で判断してそうしたのだと。

僕は分かるような気がする。今どき、朝鮮人の子だからと言ってアルバイトを採用しないようなコンビニは恐らくない。けれど万が一、別の理由を付けられて不採用となった時が怖いんです。そこでアルバイトができないということが残念なのではなくて、自分が本名で来て、やっぱり朝鮮人はあかんのかと、そこで切られるという事実遭遇するのが怖いんですよ。だからそういうものを未然に防ごうとする。

でも僕は口惜しくて、次の日曜日、子どもの教会の礼拝の時に言ってやった。今思い出しても無茶苦茶な説教だったのですけれど、アブラハムの神様、私たちの信じている神様は、寄留者の神様なんだ。寄留者というのは住むところがない人たち。聖書の中に登場してくるアブラハムは寄留者なんだ。住むところがないから至るところを転々としている。けれど神様はこの寄留者のアブラハムに約束する。「あなたを祝福する者を私は祝福し、あ

なたを拒む者を私は呪う」と。要するに、聖書に出てくるこの神様は、寄留者の神様なんだ。僕たちは言ってみれば、この日本に寄留する寄留者なんだ。だから、この聖書の神様は僕たちの神様なんだ。あなたが本名であのセブンイレブンに行って、その本名で採用してくれるなら、あのセブンイレブンは祝福される。もしセブンイレブンが拒むなら、私たちの信ずる神様は、セブンイレブンを呪う。そういう神様なんだ。ちょっと大胆でしたけれど、僕はそう言ってしまった。

「あなたを祝福する者を私は祝福し、あなたを拒む者を私は呪う」と神はアブラハムにそう約束している。だから、恐れるな、神様はいつもついてくださる、と祝福してあげたのですが、今はもう 23 歳になりましたか、本名でしっかり生きています。



関係の回復 和解して自分を見つける

通名を名乗っているからダメだ、ではないんです。今、公務員になりたいからといって帰化する子どもたちがいます。川崎市などは随分公務員になれるようになりましたけれど、それでもある管理職から上へは行けない。職種によって、例えば象徴的なことと言えば、消防士にはなれないのです。公権力の行使に携わる職には就けないというのがあるんです。公権力の行使とは何か、それと消防士はどういう関係があるかと言うと、火事になった時に許可なくその家に入ったり、隣の家に入ったりできるのが公権力の行使なんです。許可がいない。権力の行使。そういう職種に外国人は携わることができないのです。在日はなれない。消防士になりたいとか、レスキュー隊にあこがれる子どもがいます。けれど、なれないと知ると帰化するんです。でも、そういう職に就きたいから僕は日本に帰化するということ、悪と呼ぶ根拠はどこにもない

んです。僕はそれでいいと思っています。

民族の帰化に関わる問題は、話すと長くなるので端折りますが、結論から言えば、そうなんです。ただ譲ってはならないのは、自分のルーツです。そこを譲ってはならない。僕はいつも聖書の根拠として覚えているのは、申命記 26 章であります。「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。・・・」。これはイスラエルの一番古い信仰告白です。信仰告白とは、自分は何者かという告白であります。そこで彼らは自分の歴史を考える。自分の先祖はそうであった。滅びゆく 1 アラム人であった。言葉を換えたら、私の先祖はカスミたいな存在であったということあります。それをむしろ誇りに思っている。そういう者に神様は愛と祝福の御手を差し伸べてくださった。だから自分たちが在日であるということを決して恥じてはならない。そんなふうに私は子どもたちや 3 世、4 世たちに語っています。

私自身、在日で生まれてよかったと思えるその根拠は、日本に帰ってきて、本からではなく自分の歴史、これまで拒否してきた歴史をもう一回見つめ直し、それを受け止める。またそのことを通して、自分自身が何者であるのかという根拠を見出したいと思ったのです。要は、アボジと和解するということなのです。とにかくイヤだったんです。あの人の元から 1 日も早く逃げ出したかったのです。朝鮮臭いあの家から 1 日も早く逃げ出したかった。けれど、その否定してきたものを今一度受け入れ、一体私の親はいつどこで生まれ、どうやって日本に渡ってきたのか、もう一度一から受け止める。そして親と和解することが、私自身が何者であるのかを見出すことであり、そこに自分が在日であることの根拠を見出していきたいわけです。

ですから、僕は帰ってきてから仕返しをしたんですよ、僕をいじめた神学校の奴らに。彼らはこんなことを言っていたんですよ。「在日の女性なんていうのは、在日の社会の中でも差別されて、本当にみすぼらしい生活をしている。朝一番にリヤカーを引っ張って段ボール集めて、そういうことをしている。汚らしいというか、侘しいというか、そういうことをしているんだ」と非常にマイナスのイメージで言うわけなんです。事実そうなんです。でも、そう言われたら、僕は困るんです。なぜかと言えば、y軸で示したこれは当たっているかもしれないけれど、では朝一番にリヤカーを引っ張って段ボールを集めているハルモニは誰のことかと言ったら、それは私のハルモニのことです。僕のハルモニも昔リヤカーを引っ張って段ボールを拾い集めていました。僕は子どもの頃からそれをずっと見てきていますけれど、それを汚らしいとか、みすぼらしいとか思ったことは一度もないんです。そういうふうに見ているお前と、そういうふうには思わない俺がいて、そこで僕は勝負しようと思った。汚いとか、みすぼらしいとか、恥ずかしいと思わない自分の感性をむしろ信じていこうと思った。

ある時、大阪から母親が出てきました。夜行バスに乗って町田まで来たのです。僕は農村伝道神学校から朝早く友達に車を借りて迎

えに行きました。駐車場に車を停めてターミナルの方に行ったら、人ごみの中に母親の後姿がありました。小学校の時に、買い物帰りの母に「オンマ！」と言えなかったことが走馬灯のようによみがえってきて、ドラマのような本当の話ですけど、「ここや」と思い、「俺はここからやり直さなあかんのや」と思って、何もそんな馬鹿でかい声を張り上げなくてもいいのに、「オンマ！」と叫びました。便利ですね。「オンマ」なんていうのは自分の子どもしかいませんからね。「オンマ！」パツと振り向く。その代わり他の人も振り向きましたけれどね。それから東京見物に連れて行って、意図的に人前で「オンマ、飯、食に行こう」とか「オンマ、あれは何や」とか、「オンマ、オンマ」と言う。すると気持ちがいいのです。僕にとって親と、失われた「外では隠さなあかん」日本で生きていくためにこういうものは捨てなあかん」と思っていたものを一つ一つ捉え直し、再発見していく。それはとりもなおさず親と和解していくということ。関係を回復していくという中で、自分自身が何者であるかということが明らかになっていくのであって、またその先に「ああ、俺は日本で生まれ、在日でよかった。本当によかった」と思える自分がここにあるということ。これを本当に神様に感謝しています、というまとめ方は牧師っぽいですか？ 終わります。



社会委員会からのお知らせ

10月4日(日)に社会委員会学習会を開催します。植田善嗣さん(カラバオの会、上大岡教会員)を講師としてお招きし、「新・入管法および難民認定法」というテーマで講演していただきます。多数ご参加下さい。

教区基地・自衛隊問題小委員会とヤスクニ・天皇制問題小委員会の共催で10月3日(土)13時30分から16時30分まで、六角橋教会においてDVD『冬の兵士』上映会と田保寿一監督の講演会を開催します。どうぞご参加下さい。